

立命館大学アート・リサーチセンター
 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「日本文化資源デジタル・アーカイブ研究拠点」
 2015 年度 共同研究成果報告書〔研究資源活用型〕

2016 年 4 月 22 日 提出

1. 研究課題名	
都市の地面の平面構成に関する基礎的研究 (英文表記: Basic Study on Planar Composition of Urban Ground)	
2. 研究代表者	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
北 雄介(きた ゆうすけ)	京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学 ユニット・特定講師
3. 研究分担者 (合計: 名) ※アート・リサーチセンター所属者は、「ARC 所属教員欄」に○印を付けてください	
氏名(ふりがな)	所属機関・職名
矢野 桂司(やの けいじ)	立命館大学文学部地理学教室・教授
中小路 久美代(なかこうじ くみよ)	京都大学学際融合教育研究推進センターデザイン学ユニット・特定教授
栗田 雄一(くりた ゆういち)	広島大学大学院工学研究院電気電子システム数理部門・准教授

4. 研究課題の概要(300 字程度) (申請書から変更がある場合は、変更点が分かるように明記してください)
<p>申請者らは「地面」(ground)に着目して、都市の全体的な在り方を解説する研究を行なっている。地面は都市にかかわる多様な人々の意志を反映しており、かつ平面的に記述し、分析することが可能だからである。また地面はこれまで建築や土木工学、ランドスケープなどの分野で個別に扱われてきており、全体を考えたデザインもなされておらず、都市環境をよりよいものにするための鍵概念でもあると考えられる。</p> <p>本研究ではまず、京都市内の1街区周辺の地面の平面構成を、GISソフトを用いて記述する。その際に形態、素材、色、高度、所有権、機能などの複数のレイヤーにおいて記述する。次にその形態解析を行ない、レイヤーごとの特徴やレイヤー間の関係性を明らかにする。</p>
5. 研究成果の概要
<p>本年度は、平面(二次元)の地面記述に先立って、線(一次元)での記述について検討した。記述対象は建築のアプローチ空間とする。アプローチ空間のデザインには建築、都市、人間の間の関係が色濃く反映されており、地面に着目することで都市や建築を読み解くという本研究の趣旨に合致する。</p> <p>具体的には、京都市中心部の烏丸通西側と麩屋町通東側(いずれも御池通(北)～四条通(南)間)について、現地調査と、MMS 点群データによる距離測定とを組み合わせた調査を行なった。その調査に基づいて、地面の何を記述すべきかという項目を、「場所」(街路、縁石、アプローチ空間、エントランスと内部)と「プロパティ」(アピランス、平面形態、断面形態、機能、付加物、開口)のマトリクス形式で整理した。そしてそれに則って、上述区間のアプローチ空間の地面の構成を記述した。</p> <p>これにより、地面のデータベースの基本構造を知ることができ、また記述可能性が確認された。データベース化ができれば、①素材や色、スケールなどに関する単純集計、②隣接素材同士、隣接敷地同士などの関連性の分析(ネットワーク分析や共起性分析など)、③地面と、建築やその機能などのコンテキストとの関連性の分析、などが可能となる。</p> <p>以上の内容について、論文を1本執筆した。</p>